

Title	書評 井上治子著、『想像力-ヒュームへの誘い』
Sub Title	Book review
Author	三浦, 雅弘(Miura, Masahiro)
Publisher	
Publication year	
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.15 (2000. 5) ,p.107- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20000531-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

井上治子著、『想像力 — ヒュームへの誘い』

(三一書房, 1996年)

三 浦 雅 弘

本書は著者井上治子氏の札幌大学における「思想と文学の間」と題された講義から生まれたものである。例年その講義では「想像力」がテーマとして掲げられ、多様な観点から哲学と文学の関係が考察されるという。井上氏はまず日本で英文学を修められた後、最終的には大学院をオクスフォードの哲学のコースで卒えておられ、かくのごとき主題に最適の経歴を歩まれている。

そのような成立の経緯もあずかってか、本書は丁寧体でつづられ、改行もかなり多めにとられている。このことは学生たちにとって読みやすいだけでなく、その思考速度を過度にはやめないという哲学書にとって望ましい特性を本書に備えさせている。本書は研究書という範疇におさまるものではないかもしれないが、ヒュームの研究者のみならず、文学をはじめとする芸術一般に関心をもつ者にも極めて示唆するところの多い良書である。以下、本書の構成に沿ってその内容を概観しながら、評者の思うところを記してみたい。

巻頭もなくのところ、一般に想像力と呼ばれている能力の働きは、著者によっておおむね以下のように整理されている。

1. いま現実には知覚していないものについて、それを知覚しているかのような経験を呼び起こす能力。(イメージを思い描くこと→第四章, 夢を見ること→第五章)

2. 現実の知覚に反することや、知覚する可能性のないことを心の中で作り上げる能力。(仮定すること、願望すること、虚構を作ること)
3. 過去に知覚したことを、いま言わば心の中で知覚することを可能にする能力。(想起すること)
4. 素材として感覚器官に入るものを、まったく別次元の知覚の対象として表現したり、鑑賞したりすることを可能にする能力。(芸術作品の創造と鑑賞→第二、三章)

著者の概念整理は大変明快かつ有用なものであるが、その一方で、概念的にはそのように区分される機能も、現実においては相互に絡まり合って発現するというのも論を俟たないであろう。そのことは例えば、イメージを想い描く機能と、芸術作品を鑑賞する機能とが本書の第三章において緊密に結びつけられて論じられているところにも窺われる。そこでの著者の議論は次のように要約されよう。著者によれば芸術の本質はその表象的特性にあるが、その表象という概念は、二種の対象の区別とそれらの間の相互依存関係を要請するという。一例としてゴッホの自画像を目の前にするという状況を考えるならば、そのときわれわれはある肖像画という直接対象とゴッホという間接対象をもつ。このとき直接対象は間接対象を知覚するための十分条件ではないものの、必要条件であることは言うまでもない。他方、その直接対象は間接対象としてのゴッホがそこに認識されてはじめて肖像画になるという間接対象への依存関係をもっている。二種の対象の間にこのような相互依存関係が成り立つとき、直接対象は間接対象の表象である、と言われる。すると、間接対象の表象として直接対象を知覚することは、「AをBとして見る」という形式で記述されるいわゆるアスペクト知覚と構造を共有するものと考えられる。そしてつとにウィトゲンシュタインによって指摘されているとおり、アスペクト知覚とイメージを想い描くこととの間に大きな類似性があることは異論の余地を残さないであろう。

ところで、イメージと言えばその存在を否定するギルバート・ライルの『心の概念』（井上氏はこの記念碑的著作の邦訳者のひとりである）における議論はよく知られている。井上氏はイメージの存在をめぐる議論のうちに、ひところ賑やかだった感覚データの存在をめぐる擬似問題と平行する構造を見てとっている。すなわち、そもそも感覚データは知覚の対象の存在に言及せずに第一人称的知覚を記述するために導入されたものであった。ところが当初の目的が見失われると、感覚データ自体が知覚の対象と見なされて、それはどこに定位されるべきかという問題が生み出されたのである。知覚の対象とその現象論的記述としての感覚データとが区別されねばならないと同様に、イメージの対象とイメージを想い描くことも区別されねばならない。たとえ少女の抱いている人形が微笑みをたたえてはいなくとも、彼女がその想像力の向かう対象としての人形のうちに微笑みのイメージを想い描くという行為的プロセスは無論成立可能であろう。イメージを想い描く過程が誤って物象化されるとき、過程-所産の曖昧性（process-product ambiguity）が引き起こされると言ってもよいだろう。著者の議論が以上のように要約されるとするならば、著者とライルとの間に見解の相違が生ずる余地は評者には見いだせないように思われる。評者は「絵を見ることと絵を描くこと」と題されたこの第三章に大いに啓発されたが、あえて言えばただ一点、アスペクト知覚と通常の知覚との区別の可能性には疑問をもっている。

第五章の「夢」という主題が、著者の指摘するとおり、夢と現実を区別できるのか、私がいま知覚しているこの対象は実際に存在しているのか、という問いを通して、外的世界の存在という哲学の核心的問題のひとつに接していることは疑いようがない。しかし本章の最終的な焦点は、夢を見ることとイメージを想い描くこととの異同に絞られていると言ってよい。もし夢を見ることがイメージを想い描くことと共通点をもつ心の働きであるならば、後者が想像力の働きによると見なされうるような意味において、

夢を見るためには想像力の働きが不可欠なものとして要請されよう。

著者はその考察に先立って夢と幻覚との異同についても頁を割いている。例えば、私の部屋の壁に無数の蟻が這っているのが見えるという場合には、私の経験は、(1) 通常の知覚、(2) 夢、(3) 幻覚、という三種の可能性がある。著者によれば、夢が他の二つと根本的に異なるのは、現在形で語ることができない、すなわち、「私はいま部屋の壁に無数の蟻が這っている夢を見ている」とは語れないところにある。つまり、視覚的な幻覚であればそれは触覚等の通常の知覚と多くの場合両立しており、両者を照合して整合性を検討することにより、幻覚を現在時制においてそれと同等することが可能である。それに対して、夢においては私は通常のあらゆる知覚から遮断されているために、夢と通常の知覚とは基本的に排反的な関係にあると言えよう。

しかしだからといって、夢と通常の心的経験との距離を過大視しないことは、著者の秀逸なスタンスを証し立てている。夢という主題に関して最も大きな影響力を揮った哲学者のひとりにはノーマン・マルコムであろうが、彼によれば、夢には歯の痛みや悲しみなどと違ってその外的兆候ないし基準が存在しない。夢の唯一の基準は醒めてからの報告のみ、というわけである。ところが井上氏はこの主張に承服しない。氏の反論は次のようである。例えば、(1) 私が夢の中で愛猫に死なれて悲しんでいるとしよう。そして、(2) 胸の塞がるような心持ちに目を覚まして、枕が涙で濡れていることに気づいたとする。このとき、この悲しみが目を覚ましているときの私の通常の悲しみと異なるのは、その悲しみが偽りであることではなく、対象をもたないことであろう。すなわち、私が悲しんでいたはずの「愛猫の死」は現実には存在しておらず、流された涙は(1)と照合されることによってはじめてその意味を獲得する。著者によれば、目覚めたときの感覚や身体的変化と夢の記憶とのこのような照合、重ね合わせは、われわれが経験している日常的な出来事であり、この重ね合わせこそが、われわれが夢という概念を獲得する原初的な方法なのである。かくして、もし著者の

仮説のとおり、夢がわれわれの身体に示される外的兆候や基準と結びついているからこそ夢の概念が獲得されるとするならば、マルコムのかえに反して、夢は痛みや感情の場合と同様に外的基準をもつことになる。著者のマルコムへの異議申し立てには大きな説得力が感じられる。

では、夢を見ることとイメージを想い描くこととの異同はどこにあるのか。例えば、1. 「私は[わたしが空を飛んでいる]のを想像している」と、2. 「私は[わたしが空を飛んでいる]夢を見ている」とを比べてみよう。一般にイメージはその人の意志によってコントロールが可能であり、したがって1. では[]の中を「私」の意志により自在に変更できる。のみならず、1. の「私」はその想像のうちに空を飛ぶ自分の姿だけでなく、「わたし」の視点にあらわれるものをも取り込んでいる。すなわち、私は想像の中の「わたし」の視点をも合わせもつのであり、裏を返せば、私はそのような視点とそれによって得られる眺望や気分を得たいからこそそのような想像をするのである。著者によれば、想像とは元来、いまこの瞬間において私が占有している視点以外の視点を獲得するための方法なのであり、現実の私には不可能な経験を得ることを目的に架空の「わたし」を創作することなのである。それに対して、夢はその人の意志によるコントロールが不可能であるのみならず、2. のような表現そのものが不自然であると言える。その理由は、夢を見ている（すなわち、眠っている）「私」と夢の中の「わたし」とは同時には成立し得ないからである。だからこそ、夢を見ている「私」は夢の中の「わたし」をコントロールできないし、共通の視点ももてないわけである。

このように夢を見ることとイメージを想い描くことの間にはいくつかの顕著な相違がある。しかしながら著者によれば、夢を成立させる根底的な条件として想像力が要請されることを見抜くならば、少なくともある意味で、夢を見ることはイメージを想い描くことであるとする主張は正当化可能である。イメージを想い描くことがプロセスであって、イメージそのものを知覚の対象になぞらえて措定することの誤りが先に指摘されたが、

同じくいかに視覚的要素をそなえていようと、夢そのものもまた知覚の対象のごとくには扱いきれない。私の夢が私の経験の一部を構成しうるのは私の記憶としてであるが、このことは「夢を見る」と「夢を思い出す」とが、決して同一ではないにせよ不可分であることを意味している。そして夢が思い出されることをその成立の条件としていることは、夢を可能にする最も重要な能力が想像力にほかならないことを示している、と著者は考える。なぜなら、われわれが過去の出来事や経験を思い出そうとするとき、最も一般的かつ有効な方法はイメージ化することだからである。

さらに立ち入って検討するために、(1)私は愛猫に死なれて悲しんでいる、(2)私は目を覚まし、それが夢であったことを知る、という先の例をもう一度考えてみよう。(1)において私が悲しんでいるのは、夢の中での本当の愛猫の死であって、愛猫の死のイメージではない。しかしそれが(2)の段階に至ってはじめて(1)が夢、すなわち擬似経験もしくは非現実の出来事であるという認識が得られ、その夢を思い起こしたり語ったりするという形でイメージを想い描くことが可能になる。すなわち、現在形の夢の中でイメージを想い描くことは通常の夢ではまずないと言ってよいが、われわれは眠りから醒めてはじめて夢について語ることができ、そのときにはイメージを想い描いているのである。この意味において夢を見ることはイメージを想い描くことだと述べることには何の問題もないであろう。

本書第六章は「情念」、第七章は「愛」と題されていて、ともに、特に第六章は、本書中最もヒューム的な主題を直接的に扱うものである。ただし著者の「あとがき」によれば、本書全体は想像力論の「基礎編」とも言うべきもので、後日「応用編」をまとめたといふことであり、これら最後の二つの章は来るべき「応用編」の序章の趣も感ぜられる。拙評の最後として、第六章の中の「ヒュームはデカルト主義者である」と題された節について一言しておきたい。そこで著者は、ヒュームにおいて感情がその原

因や対象と本質的な結びつきをもたされていないところに、デカルトとの類似を見ている。しかしヒュームによる感情の因果論的分析は、感情とその対象との間に—「本質的」であるかどうかはともかくとして—「志向的」な結びつきを認める点で画期的でもあれば、デカルトに別れを告げるものでもあろう⁽¹⁾。

井上氏のオクスフォードの大学院における指導教授はストローソンだったようである。氏の勉学された環境が、例えばエディンバラのごとくヒューム研究者が目白押しのところでなかったことが、本書の心地よいヒュームとの距離感を生み出しているのではないだろうか。評者は気持ちよく読み進みながら、随所で新鮮な刺激を受けるという至福を味わったが、それはあまたの哲学書においてめったに得られないもののように思われる。

註

- (1) Jenkins, J. *Understanding Hume*. Edinburgh: Edinburgh U. P., 1992. p. 135.